



TITLE:

# 山陵制度からみた律令国家の転回( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

黒羽, 亮太

---

CITATION:

黒羽, 亮太. 山陵制度からみた律令国家の転回. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19426>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	黒羽亮太
論文題目	山陵制度からみた律令国家の転回		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、平安時代中期～後期において、天皇陵を中心とする山陵の制度がいかなる変化を遂げたかを実証的に解明しようとしたものである。その際、近年著しく進展した平安時代史研究との接続が図られ、列島社会の古代から中世への移行が新たな観点から跡づけられた。論文全体は、研究史をまとめた上で課題を提示した序章、全体の総括と今後の展望を示した終章のほか、全5章から構成され、さらに補論が2篇付されている。</p> <p>第1章「円成寺陵の歴史的位置」は陵号、すなわち天皇陵の呼称の変化に着目し、律令体制下の山陵制度が大きく変容するさまを検討したものである。論者によれば、11世紀初頭に一条天皇陵が「円成寺」陵と呼ばれてからは、天皇陵は寺院名を冠することが一般的になる。こうした陵号の変化は、天皇の遺体・遺骨が寺院の堂舎内に安置されたことによるものであった。かかる新様態の天皇陵は〈寺陵〉という用語で把握することができ、12世紀前葉の白河天皇「成菩提院」陵において確立をみた。それまでの一条天皇から堀河天皇まで、すなわち摂関期から院政初期の天皇の場合、死後当初は遺体・遺骨が〈寺陵〉に安置され、一定期間ののち墳墓に埋葬されており、山陵から〈寺領〉への過渡的様相を呈する。しかし、陵号のあり方などに照らせば、これは〈寺陵〉に直接つながる先駆形態と評価すべきものである、という。かくして一条天皇「円成寺」陵に至り、山陵制度は律令体制下とは大きく異なるものに変化し、それは律令体制の中世的転回の一側面である、との理解が提示されている。</p> <p>第2章「観隆寺陵一忘れられた平安時代天皇陵の発見―」では、古代史料に一度だけしか現われず、それゆえ研究者からも看過されてきた「観隆寺」陵を考証し、これが寛仁元年(1017)に死去した三条天皇の陵であったことを述べる。論者は『本朝世紀』の欠損・誤写を慎重に分析し、後三条天皇が伝統的方式にのっとり、みずからの即位の正当性を示すために直系天皇陵および外戚墓に奉告の使者を遣したが、その対象のひとつであった観隆寺陵は後三条の外祖父三条天皇の陵としか考えられず、これは観隆寺が北山にあって貴顕の葬送に際して遺体が移送される寺院であったこと、三条天皇が北山で火葬され「寺後山」に埋葬されたことと符合するという。この考証により、11世紀初頭から〈寺陵〉が展開していくとした第1章の結論に、新たな裏付けが与えられた。</p> <p>第3章「浄妙寺の位置と古代・中世の宇治」は、藤原氏の一門墓所を管理していた浄妙寺の所在地を中心として、古代・中世における山城国宇治郡南部の地域史を論じ</p>			

たものである。論者によれば、浄妙寺についてはこれまで確実な故地が見定められておらず、宇治市教育委員会が検出した方形基壇遺跡も「浄妙寺三昧堂」と断定するには文献的徴証を欠く。ところが12世紀に作成された「山科郷古図」には、はっきり「浄妙寺」が記されている。従来この記載が注目されてこなかったのは、『宇治市史』の釈読に漏れがあったためと思しく、それゆえ「山科郷古図」を改めて読み解き、関連史料と突き合わせることによって浄妙寺の立地・性格が明確になる。この方法によって論者は、浄妙寺が現御蔵山団地のある丘陵にあったことを論証し、また浄妙寺南大門が木幡山の一門墓所の入口としても機能していたことを説く。さらに『延喜式』陵墓歴名の宇治郡所在陵墓について情報を整理し、菟道稚郎子の「宇治墓」もまた、この木幡山にあったことを推測する。

第4章「円融寺と浄妙寺―摂関期のふたつの墓寺―」では、第3章の議論に立脚しながら、藤原道長の浄妙寺と円融天皇の円融寺について、それぞれ摂関家・天皇家の一門墓所として建立されたことの歴史的意義を論じる。まず浄妙寺については、木幡に一門墓所が成立するのは10世紀中葉と考えられ、11世紀初頭に道長が浄妙寺を創建したのは、累代の墓所の継承者であることを明示するためであったとする。また、その営為は円融寺に倣ったものと見られ、円融天皇も10世紀後葉に先祖・一門の墓域に接して寺院を建立することによって、みずからの即位の正当性を強調し、子孫への皇位継承を確実にしようとしたと推測する。また近年、院政期仏教政策の嚆矢として注目されてきた後三条天皇の円宗寺についても、天皇家一門墓所との関係から再検討を加え、円融院山陵に至近にあって円融の立場を継承するために創建されたとの考えを提示し、「四円寺」は一括して捉えるのが正しく、円宗寺に新しい意義が付与されるのは院政期になってからのことと述べる。

補論1「四円寺の故地」では、上述の四円寺について、史料を博搜した上で厳密な現地比定を試みている。

第5章「寺院と陵墓の関係史」は、ここまでの論考をふまえ、改めて律令山陵制度の転換、とりわけ検討が不十分であった平安前期のそれについて検討する。論者によれば、11世紀初頭、天皇が死んでも山陵を作らず〈寺陵〉に葬るようになったが、それまでに造営された山陵についても変化が認められる。すなわち宇治山陵が浄妙寺に、後田邑山陵が仁和寺に取り込まれたように、およそ10世紀後葉を境として山陵が〈寺陵〉化していった。それとともに、従来は国家的祈願の対象であった山陵は単なる墓所へと転落し、ケガレが忌避される場所となっていく、とする。さらに議論はその前史へと進み、9世紀前葉に嵯峨・淳和両太上天皇が山陵を作らなかったことの重要性が指摘される。彼らの選択によって、太上天皇は帝王ではなく、山陵を作る必要はない、との観念が形成され、太上天皇の墓は国家的管理を離れ、「家」によって私的管理されるようになった。それが寺院によって管理される〈寺陵〉につながってい

くという。なお、9世紀中葉の文徳天皇についても論及し、彼が唐風皇帝祭祀に熱心で、その一環として特徴的な山陵政策を採ったことを屢述する。しかし、山陵が国家的管理の下にあったことは揺るがず、太上天皇の山陵が造営されなくなったことこそが後代の起点となった、との評価が下されている。

補論2「山陵祭祀の変容」では、山陵使が10世紀末を境に激減するとの先行研究を前提として、その後の山陵使は恒例のものを除けば、すべて何らかの「奉告」のためのものであったことを初めて指摘する。すなわち、この時期に国家的祈願のため「奉幣」を行なう山陵祭祀が消滅したと評価し、山陵制度の根本的な転換を改めて強調している。

なお、終章「山陵制度からみた律令国家の転回」では総括・展望を行なうだけでなく、『延喜式』陵墓歴名の読み直しを試み、律令体制成立以前の倭国の墳墓管理体制に関する推論を展開して、そうしたシステムの上に律令山陵制度が生まれたことを指摘している。

以上、第1章から第5章にわたる体系的かつ多角的な分析により、律令山陵制度の転換において最も注目すべきは、10世紀後葉から11世紀初頭に生じた〈寺陵〉や一門墓所の形成であったこと、基本的動因は「家」による私的な墳墓管理の浮上であり、それが国家による管理・祭祀を骨抜きにしていたことが解明された。律令山陵制度は官僚制の一環をなす諸陵寮、公民制の一環をなす陵戸によって運営されたが、論者によれば、両者とも上述の時期に後景へと退いていくことになる。官僚制・公民制が律令体制の車の両輪であることに照らせば、山陵制度の転換は律令体制そのものの転換をよく象徴しており、したがって摂関期以降に律令国家が存続していたと言うことはできない、と結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、天皇陵を中心とする山陵制度の変容について犀利な分析を加え、そこから平安時代中・後期における律令国家の解体、中世的体制の生成を実証的に論じたものである。全体は本論5章・補論2篇から構成され、その前後に研究史を整理して課題を述べた序章と、総括と展望を示した終章が配されている。

平安時代史研究は、ここ四半世紀の間に長足の進歩を見せた。古代史研究者を主な担い手として、古記録や儀式書をはじめとするさまざまな史料が厳密に読み解かれるようになり、その結果、政治史・制度史・社会史・文化史・宗教史の各方面において、10世紀後葉～11世紀初頭に巨大な変容が見出された。これを古代から中世への移行にどう位置づけるか、議論はなお帰一していないが、摂関期を中世の第一段階と見る新しい考え方は、有力な仮説として認められつつある。

論者はこのような研究動向に悼さし、いまだ検討が十分でなかった平安時代の山陵制度について、体系的かつ多面的な検討を行なった。その結果、やはり上述の時期に原理的転換が起きており、律令体制からの離脱と評価すべきことが明らかになった。しかし、本研究は時代区分論の「応用問題」に取り組んだようなものでは、決してない。古墳時代における王陵の政治的機能を前提として、律令体制とともに唐の皇帝陵制度を継受し、構築された山陵のシステム。それが全く異なった墓制へと組み替えられていく平安時代の歴史過程を跡づけた研究は、これまで全く存在しなかったのである。このこと自体の研究史的意義に加え、王権・貴族社会・寺院などに関する幾多の実証的成果を提示し、古代・中世史研究の進展に貢献したことは特筆されねばならない。以下、本論文の構成に沿って、顕著な成果をかいつままで述べる。

第1章「円成寺陵の歴史的位置」では、11世紀初頭に一条天皇陵が「円成寺」陵と呼ばれて以降、天皇の陵号には寺院名を用いるようになったことを究明し、その要因として、天皇の遺体・遺骨が寺院の堂舎内に安置され始めたことを挙げる。かかる新しい天皇陵は〈寺陵〉と概念化することができ、12世紀前葉の白河天皇「成菩提院」陵で確立をみるが、それまでの摂関期においても〈寺陵〉は確かに用いられており、中世に直接つながる陵墓形態はこの時期に発生・一般化した、と評価する。研究史上初めて〈寺陵〉の出現を実証的に論じ、山陵制度の変容という側面から律令体制の解体・転成を明らかにした、刮目すべき研究と言えよう。

第2章「観隆寺陵」は、これまで見過ごされてきた「観隆寺」なる陵墓が、寛仁元年(1017)に死去し、北山に葬られた三条天皇の陵であったことを論証する。『本朝世紀』写本の欠損・誤写を手際よく解析しつつ、即位奉告の対象となるのが直系天皇陵と外戚墓であったという独自の知見を用いた考証は、きわめて精緻かつ論理的であって、11世紀初頭から中世的〈寺陵〉が展開したという第1章の結論に対し、堅固な裏付けを与えるものである。

第3章「浄妙寺の位置と古代・中世の宇治」は、藤原氏の一門墓所を管理した浄妙寺を軸として、古代・中世の宇治地域史像を提示する。12世紀初頭の「山科郷古図」

を現地に即して読み解き、関連史料を博搜・活用することにより、これまで誰も気付かなかった同図の「浄妙寺」という記載に生命が吹き込まれた。浄妙寺南大門が木幡山墓所の入口であったという発見は、今後の遺跡調査に指針を与えるものでもある。歴史地理学・考古学の知見を盛り込んで、地域史研究の豊穡な知見のなかに陵墓を位置づけ、その立地と機能を具体的に示すことに成功している。

第4章「円融寺と浄妙寺」では、円融寺が天皇家の、浄妙寺が藤原氏の一門墓所に附属して建立されたことの歴史的意義を論ずる。木幡山に一門墓所が生まれたのは10世紀中葉であるが、半世紀後、藤原道長はその管掌者であることを明示すべく浄妙寺を創建した。それは円融天皇が10世紀後葉、先祖・一門の陵墓域に円融寺を建立し、みずからの即位と子孫の皇位継承の正当性を確保しようとした事績に倣ったもの、と評価する。寺院による陵墓管理は〈寺陵〉成立の前提であるが、現地踏査の成果をよく活かしつつ、天皇家・藤原氏の私的陵墓経営の発生を解明しており、また摂関政治全盛に至る政治過程の理解にも資するところが大きい。

第5章「寺院と陵墓の関係史」では、山陵制度の転換について見取り図を提示し、その前史をつまびらかにする。9世紀中葉、嵯峨・淳和両太上天皇の意向をうけ、太上天皇は帝王ではなく、山陵を造営する必要はない、という観念が宣揚された。太上天皇の陵墓は王家一族や寺院による私的管理を受けるようになり、10世紀後葉には既存の天皇陵も寺院に取り込まれ、〈寺陵〉の性格を帯び始める。そして11世紀初頭、天皇陵が当初から〈寺陵〉として営まれるようになり、律令山陵制度は最終的に解体して、中世的墓制への転回をとげたとする。文徳天皇が唐の皇帝陵祭祀を模倣したという考説を含め、長い時代幅をとって斬新かつ説得的な議論を展開しており、ここに律令山陵制度の変質過程が具体的に跡づけられるに至った。

このように、本論文は古代的山陵が衰滅し、中世的〈寺陵〉が発生した時期と要因を実証的に明らかにし、律令体制の解体・転成に関する議論を新段階へと導く、画期的論考である。写本調査をふまえつつ、きわめて厳密に文献史料を解釈・運用しているだけでなく、現地踏査を積み重ね、歴史地理学的・考古学的な知見を活用するなど、方法的にも評価すべき点が多く見られる。これに加えて、比較史的な考察、律令体制以前への論及なども試みられているが、なお十分とは言いがたく、今後いっそうの研鑽が期待されるところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。